

学位論文題名

雨月物語の表現

学位論文内容の要旨

1 典拠からの逸脱

〔1.1 「菊花の約」—自立する〈作者〉—〕

『雨月物語』の「菊花の約」と中国白話小説『古今小説』卷十六の原話とを詳細に比較検討する。その検討により、一見、原話そのままの翻案として創作されたとも思われる出来栄えになっているのであるが、実は秋成独自の世界に変換されていることを論じる。具体的には、原話での「信義」の扱い方を秋成が否定し、丈部左門と赤穴宗右衛門との関係が原話に比して極めて理念的な関係として構築されているとし、理想的な「信義」を描くことが秋成の意図であったと論証した。

〔1.2 「浅茅が宿」—創られる伝説—〕

「浅茅が宿」の表現の豊饒性を、典拠としての和歌を分析していくことにより明らかにした。ここでの分析は、典拠の内容が物語の展開そのものに影響を与える仕組みを中心に論じるものである。勝四郎の場合、典拠の和歌が勝四郎の「物にかかはらぬ性」を読み手に定着させるように機能し、宮木は本来的には手見女との類似性を持たないにもかかわらず、宮木が「永遠の女性」としての〈宮木伝説〉として読み込まれるように仕向けられた秋成の仕掛けを読み解いていく。

2 偏向する〈語り〉

〔2.1 『雨月物語』の〈語り〉の構造—「仏法僧」・「吉備津の釜」・「青頭巾」—〕

『雨月物語』の〈語り〉の構造を「仏法僧」、「吉備津の釜」、「青頭巾」の三篇を基に分析を試みる。「仏法僧」では典拠との差異から、夢然の心情を明らかにする語りの仕組みを指摘し、そのことが後の連句の意味を見出す契機となっていることを論証する。また「吉備津の釜」では、怪異表現の質の高さが、読み手を「騙って」いく語りの表現に由来していると論じ、「青頭巾」では語りの視点が意図的に変化させられている点を指摘した。

〔2.2 「白峯」—「ゆるされ」た者の論理—〕

『雨月物語』の冒頭作品である「白峯」を、『雨月物語』全体の枠組みを解き明かす指標として位置付け、その構造を考察するものである。そこでは、迫真性を帯び、恐怖感に満ちた語りを示す語り手と、対照的な西行の語りとに明確に分別されていることを指摘しつつ、その語り手が安易に西行(此岸側の人物)に寄り添っていく「偏向した〈語り〉」の傾向を明らかにし、それが秋成の〈物語〉の作法と捉える。更に西行と崇徳院とが「ゆるされ」た者と「ゆるされ」なかった者との対比として仕組まれていることを分析した。

〔2.3 「蛇性の姪」—偏向する〈語り〉—〕

「蛇性の姪」を取り上げ、最初に典拠と本編との差異を分析し、豊雄が典拠の許宣とは正反対の浮ついた性格設定がなされていることを指摘し、元々豊雄が蛇に取り憑かれる性質を抱え込んでいた点を明らかにする。次に語り手の〈注釈〉表現に注目し、語りの機能を考察する。「語り手」が客観的に怪異現象を語るのではなく、様々

な修辞の中から、「読み手」が怪異性を読み取る仕組みが施されていることを検証してみせた。

3 交渉する物語

〔3.1 『西山物語』—自註のダイナミズム—〕

建部綾足著『西山物語』の特徴的な表現である、いわゆる「自文自註」の表現を分析する。最初に「よみの巻」において物語本文が自註の歌に影響される現象を指摘する。更に他の巻での〈註〉の方法を分析し、『日本紀』、『古事記』、『源氏物語』、『万葉集』の出典数が突出して多いこと、『日本紀』、『古事記』が巻之上に集中すること、また、物語が展開するに従い、語註の数が減少し、代わりに和歌の引用が増加する点を明らかにした。また、この中でも『万葉集』の扱い方が他と異なることを、〈註〉としての引用方法が七つに分類し得ることで明らかにし、その変容の過程に、注釈という作業自体が物語と不可分になっていく様相を明らかにした。

〔3.2 『本朝水滸伝』—歌の機能—〕

建部綾足著『本朝水滸伝』における歌の機能・役割を中心に論じていく。その機能とは、物語に登場する人物が担う伝承・説話の世界が、引用古歌によりイメージを保証されると同時に、その古歌を変化させて使用することにより物語が展開されていると論じる。この展開力が「長編化」への可能性を持つものであると指摘している。

4 『雨月物語』の構成

〔4.1 「夢応の鯉魚」—往還する物語—〕

「夢応の鯉魚」において、彼岸側（怪異をしかける側）と此岸側（怪異と出会ってしまう側）との対立構造が明確に仕込まれていない点に着目する。「魚」に対してある種の「執着」をもっていた興義が、死の淵から蘇る（彼岸と此岸とを越える）体験を経るのであるが、その体験を迫真的に語れば語る程、却って周囲から奇異感を深められてしまうという構想を分析し、「執着」こそが物語展開の推進力となっていることを明らかにする。

〔4.2 「仏法僧」—考証と物語—〕

「仏法僧」を「語り」及び「注釈」という二つの視点から論及し、夢然の知識が表層的なものに過ぎなかったことを明らかにする。その分析を受けて、「玉川歌考証」へと分析を展開し、その結果、単なる考証を目的とした作品という本編の従来の評価を退け、夢然という人物のあり方をそのまま照らし返すという、作品構造にしっかりと組み込まれた意義を持つものであることを明らかにした。

5 否定された〈物語〉

〔5.1—「貧福論」の哀しみ—〕

『雨月物語』中でも異質な作品として見做される「貧福論」が、なぜ最終話という位置に据えられたのかという問題を論じる。その為に、もう一つ異質な作品と見られている「夢応の鯉魚」を参照しつつ、「夢応の鯉魚」が『雨月物語』的世界の理想を寓話として描いたものと捉え、「貧福論」はその寓話性を見事に否定した作品であると論じる。そして『雨月物語』という一つの中での、個人的な夢と時代の要請する冷酷な現実を描いた作品としてそれぞれを定位した。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 富 田 康 之
副 査 教 授 身 崎 壽
副 査 教 授 須 藤 洋 一

学 位 論 文 題 名

雨月物語の表現

本論文はA5版239頁(400字詰原稿用紙換算約508枚)で、1典拠からの逸脱、2偏向する〈語り〉、3交渉する物語、4『雨月物語』の構成、5否定された〈物語〉の5章からなる。上田秋成の『雨月物語』における「表現」の問題に焦点を絞り、各作品論を展開しつつ、最終的に『雨月物語』全体の構想にまで論を進める研究となっている。また、秋成と同時代作者である建部綾足の作品『西山物語』、『本朝水滸伝』を取り上げ、『雨月物語』との対比を明らかにしている。

本論文の審査については、平成15年12月に審査委員会を発足させ、各委員が本論文を通読し、平成16年3月に委員会を開き、本論文の成果、問題点、今後の課題等を検討・指摘し、口述審査内容を協議した。次いで口述試問を行ったのち、4月中に持ち回りで審査内容を種々検討し、5月の教授会に報告し、6月の教授会で決定を見た。

本論文の成果として以下の事柄が挙げられる。

- 1『雨月物語』の「菊花の約」と中国白話小説『古今小説』巻十六の原話とを詳細に比較検討し、理想的な「信義」を描くことが秋成の意図であったことを論証する。
- 2「浅茅が宿」において典拠の和歌の内容が、物語の展開そのものに影響を与える仕組みを論証する。
- 3「仏法僧」において典拠との差異から、夢然の心情を明らかにする語りの仕組みを指摘し、そのことが後の連句の意味を見出す契機となっていることを論証する。
- 4「吉備津の釜」において、怪異表現の質の高さが、読み手を「騙って」いく語りの表現に由来しているのと提示する。
- 5「青頭巾」において、語りの視点が意図的に変化させられていることを論証する。
- 6「白峯」において、迫真性を帯び、恐怖感に満ちた語りを示す語り手と、対照的な西行の語りとに明確に分別されていることを指摘し、その語り手が西行に寄り添っていく「偏向した〈語り〉」の傾向を持つと論証する。
- 7「白峯」において西行と崇徳院とが、「ゆるされ」た者と「ゆるされ」なかった者との対比として仕組まれていることを明らかにした上で、『雨月物語』中の他編にも構想が共通している点を指摘する。
- 8「蛇性の姪」において、典拠と本編との差異を分析し、豊雄が典拠の許宣とは正反対の性格設定がなされていることを指摘し、元々豊雄が蛇に取り憑かれる性質を抱え込んでいた点を明らかにした。
- 9 建部綾足の『西山物語』の特徴的な「自文自註」の表現を分析し、物語本文が自註の歌に影響される現象を論証した。

- 10 建部綾足の『本朝水滸伝』の歌の機能を分析し、物語に登場する人物が担う伝承・説話の世界が、引用歌によりイメージを保証されると同時に、その和歌を変化させて使用することにより物語が展開されていると論証する。
- 11 「夢応の鯉魚」において、「執着」こそが物語展開の推進力となっていることを明らかにする。
- 12 「仏法僧」において「語り」及び「注釈」という二つの視点から分析し、夢然の知識が表層的なものに過ぎなかったことを明らかにし、続いて「玉川歌考証」を分析し、その結果、単なる考証を目的とした作品という従来の評価を退け、夢然という人物のあり方をそのまま照らし返すという、作品構造に意義あるものとして論証した。
- 13 「夢応の鯉魚」と「貧福論」とを対照させ、個人的な夢と時代の要請する冷酷な現実を描いた作品としてそれぞれを定位する。また従来では、「貧福論」の物語末尾にある翁の「八字の句」が徳川時代を言祝いだ言説として理解されているのであるが、それを当世批判として読み込むという新視点を提示する。

以上、『雨月物語』について斬新な視点からの作品論を展開し、更に建部綾足の『西山物語』及び『本朝水滸伝』の分析を通して秋成の特徴を明らかにする試みがなされ、続いて『雨月物語』全体の構想にまで論究が及んでいる。このように本論文には多くの新知見が示されているが、委員会において、以下のような問題点が指摘された。

- 問題点1 物語を「書く」という行為が一回性のものとして立論する部分が指摘できるのであるが、その点についての説明が説得的であるとは言えない。
- 2 『雨月物語』全体の構想に関して、作品中央の位置付けを重要視する立場をとっているが、近世においてその位置の重要性が十分に説明されているとは言えない。
- 3 中国白話小説に関して、その理解に曖昧な点が見られる。
- 4 秋成と読者、テキストと「理想の読者」の関係において、各節での立場が完全に一貫したものとはなっていない面がある。

以上のように、本論文に問題点がないわけではない。しかし、和漢の典拠を縦横に駆使した『雨月物語』の表現を徹底的に分析し、作品と典拠との交渉関係について考察し、『雨月物語』の大きな特徴の一つに「語り」の偏向があることを明らかにしたのである。また、それがどのように書き手に位置付けられているのかを論究した。その結果、語り手の「語り」の意図的な偏向や、典拠の意味と物語内容のずれなどが、新たな意味を創り出すように書き手によって巧妙に仕組まれていることを明らかにした。これらの視点は当該研究領域での先駆的な価値を有しており、従来の『雨月物語』研究では欠如していた部分である。本論文により、新たな視点からの研究が活性化されることが十分に期待されるものである。